

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

メディア表象の不可抗性とテレビ的イメージ

著者	小林 直毅
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	56
号	4
ページ	163-176
発行年	2010-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/5353

メディア表象の不可抗性とテレビ的イメージ

小 林 直 毅

1. 意味としての感情の生成変化

何かほかのことをしながら、テレビの画面に向けていた眼差しが、あるシーンに引き留められる。ごくありふれた日常生活の一齣といえるだろう。ところが、どれほど日常的な経験であっても、一度眼にしてしまうと、安易に何かを語ることを躊躇させられる光景がある。むしろ、日常の経験として眼にしてしまったからこそ、それを語る言葉も、簡単には見つけられなくなってしまうのかもしれない。

ごく普通の暮らしをしていた家族のだれかが、忽然と姿を消してしまうような事件は、当の家族だけではなく、だれにとっても重大な出来事である。残された家族は、消息を尋ねつづけるが、一向に行方が明らかにならないとなると、深い悲しみに打ちひしがれる。ところが、姿を消した家族が、他国によって拉致されていたのだということが明らかにされる。そのとき残された人びとが、その国にたいする憤りを露わにするのは、当然すぎるほど当然の感情とその表出である。日常化したメディア環境にあっても、このような被害者たちの表情を眼にし、悲しみと怒りのあまり、満足な言葉にはならない声を耳にすると、人びとはその光景の前に立ち尽くし、語る言葉を失う。

家族を拉致された人びとの姿をテレビで見て、思わず「気持ちがよく分かる」などといってしまうと、そんな言葉しか口にできないことに居心地の悪さを感じるかもしれない。むしろ、声にも、言葉にもならない思いをそのままにして、立ち尽くしているだけの方が、打ちひしがれ、悲嘆に暮れ、憤る人びとにたいして誠実であるようにさえ感じられる。他国による拉致事件の被害者家族のメディア表象は、メディア環境に衝撃を与え、安易な言葉で語ることを躊躇させる不可抗の審級を形成している。

メディア表象のこのような不可抗性を、ここで考えてみよう。たしかに、家族を拉致された人びとの訴えが、その表情や声によってテレビで描き出されるとき、そうした出来事を安易な言葉で語ることは憚られる。しかし、それは、必ずしも言葉の安易さが状況にそぐわないからではない。そのような出来事を経験を、言葉で語ることそれ自体が失効していると考えられる。

ある国の国家機関なり、それと密接な関係にある組織が、他国の人びとを拉致するという国家犯罪は、テレビニュースなどによって日常のメディア環境で認知される。そこでは、他国による拉致事件が、言葉の意味やその論理として経験される出来事である以上に、被害者たちの表情や声、その映像や音声の意味として表現され、経験される出来事となっている。拉致が、重大な人権侵害で

あり、人びとの尊厳を蹂躪する犯罪行為であることも、言葉の意味や論理として表現される以上に、映像や音声の意味として表現されている。そして拉致の非道さも、被害者の苦痛も、言葉の意味や論理を読み取る以上に、被害者のたちの表情や声、その映像や音声を見たり、聴いたりすることで人びとは経験している。

だからこそ、テレビニュースの映像によって、被害者たちの悲痛な表情を見ることで生成した意味としての出来事を言葉で語ろうとすると、そこには違和感がつきまとう。テレビニュースの音声によって、被害者たちの言葉にはならない声を聴くことで生成した意味としての出来事を、言葉で語ろうとするとき、強引さや無理が生じてしまう。家族を他国に拉致される事件が、メディア環境の映像や音声の意味として表象され、人びとがそれらを見聴きしているがゆえに、言葉でそれらを語ることが失効させられるのだ。このような状態が、こうした事件をめぐるメディア表象の不可抗性の一つの位相である。

たしかに、この種のメディア表象の不可抗性は、「気持ちがよく分かる」とか、「共感できる」とか、「だれでも、そんな気持ちになる」といった安易な語りを抑圧する。しかし同時に、そこでは、被害者たちの表情の映像や鳴咽にも近い声の音声を、人びとが見聴きする経験においても、悲しみや、怒りや、憤りといった感情が、意味として生成している。このような感情は、言葉の意味を画定する一定の約定にしたがって、人びとに共有されているのではない。また、家族を他国に拉致された人びとの悲しみ、怒り、憤りが言語的に共有されることによって、人びとの間で当然のものとされているのでもなければ、そうした感情の表出が正当とされているわけでもない。

そうではなくて、メディア環境において見聴きされた映像や音声の、その意味としての悲しみ、怒り、憤りといった感情が、眼差しを向け、聴取する身体の働きにおいて生成しているのだ。だからこそ、映像を見、音声を聴く人びとは、そうした意味を生成する身体の働きとして、否応なく気持ちを動揺させる。その結果、人びとが、被害者の感情を当然のものとして経験し、その表出を正当なものともみなすのである。これが、家族を他国に拉致された人びとをめぐるメディア表象の不可抗性の、もう一つの位相である。

家族を他国に拉致された被害者たちのメディア表象は、その映像に向けられた眼差しや、音声を聴く身体が、悲しみや怒りや憤りといった意味としての感情を生成するがゆえに不可抗の審級を形成している。この不可抗性は、悲痛に歪んだ表情を見ることが、そうした意味としての感情を生成させるという、身体の働きの普遍性に依拠している。また、鳴咽の声を聴くことが、悲しみや怒りや憤りといった意味としての感情を生成させるという、身体の働きの普遍性にも依拠している。人びとの悲しみ、怒り、憤りを否応なく喚起する、家族を拉致された被害者をめぐるメディア表象の不可抗性は、そのような映像や音声を見聴きする身体の働きに生成する、意味としての感情の普遍性によるものなのである。

いうまでもなく、家族を拉致された人びとの表情は、彼ら、彼女たちが経験している悲しみの表れである。そして、この悲しみは、あくまでも特定の個人の具体的な悲しみである。また、メディア表象としてのこうした表情の映像を見ることも、たしかに、特定の個人の表情を見る具体的な経

験である。しかし、そのとき、そこでは、けっして彼ら、彼女たちの悲しみ自体が経験されているのではない。特定の個人の具体的な表情の映像によって、あくまでも意味としての悲しみが表現され、経験されているのだ。

引き攣り、歪み、涙を流す表情を見るとき、そこには、名前をもった、特定の個人の具体的な表情によって表現された意味としての悲しみが生成する。この悲しみとは、そのとき、そこで見られた、特定の個人の具体的な状態を表現する意味としての悲しみの感情なのである。しかし同時に、この悲しみは、家族を拉致されたという出来事を経験している特定の個人の具体的な感情だけでは留まらないし、還元もされない。それは、あくまでも表現された意味としての感情であり、そのような映像を見る身体に生成する意味としての悲しみの感情、すなわち、普遍的、一般的な意味としての感情へと変化を遂げる。つまり、このような悲しみは、G.ドゥルーズのいう、「個別的な事物の状態、特定のイメージ、個人的な信念、あるいは逆に、普遍的、一般的な概念には還元できない」、生成変化を遂げる意味にはかならない。まさに、それは、「特殊なものと一般的なものにたいしても、個別的なものと普遍的なものにたいしても、人格的なものと非人格的なものにたいしても、まったく関心を払わない」(Deleuze 1969 : 31) 意味なのである。

不可抗の審級となった拉致被害者をめぐるメディア表象は、たしかに、人びとが安易に何かを語ることを抑圧しながら、否応なく人びとの悲しみ、怒り、憤りを喚起する。しかし、そのようなメディア表象となった映像は、個別の特定の人格をもった被害者の感情をその意味として表現しているのと同時に、普遍的で非人格的な感情もその意味として表現する。メディア環境において、多くの出来事は映像によって表象される。そうした映像の光学的効果ともいえる身体が、特定のでもあれば一般的、個別的でもあれば普遍的、人格的でもあれば非人格的な意味としての感情を生成しているのである。

2. 「拉致事件」をめぐるメディア表象の不可抗性と時事性

本稿の冒頭で述べた、「ごく普通の暮らしをしていた家族のだけれが、忽然と姿を消し」、その「家族が、他国によって拉致されていた」といったテキストは、その意味として、どのような具体的な事件を表象するのだろうか。わが国において支配的になったメディア表象のもとでは、このようなテキストが表象する意味としての出来事は、北朝鮮による「日本人拉致事件」にほぼ特定されるだろう。

たしかに、このテキストは、映像や音声ではなく書かれた言語で成り立っている。それが表象可能な出来事は、映像や音声によって表象可能な意味としての出来事とは異なる。また、それを読むことで生成する出来事も、映像や音声をしたり聴いたりする身体に生成する意味としての出来事とは異なっている。しかし、「ごく普通の暮らしをしていた家族のだけれが、忽然と姿を消してしまう」ことは、特異な事態であっても、一般的に表現された意味としての出来事である。「残された家族は、消息を尋ねつづけるが、一向に行方が明らかにならないとなると、深い悲しみに打ちひし

がれる」ことは、そうした事態に直面した特定の人びとの経験である。同時にそれは、同様の事態に直面すれば、だれもが経験するはずの普遍的な意味としての出来事を表象している。「姿を消した家族が、他国によって拉致されていたのだということが明らかにされ」、「そのとき残された人びとが、その国にたいする憤りを露わにする」ことも、特異な状況下にある人びとの個別的な感情の表出である。同時に、このテキストは、同様の状況に置かれれば、だれもがそうした感情を抱き、それが堰を切ったように表出されるという普遍的な意味としての出来事を表象する。

そう考えると、他国によって家族が拉致される事件を、「北朝鮮」という固有名詞を使わずに、一般的な語句で語るテキストの表象可能な意味としての出来事は、北朝鮮による「日本人拉致事件」だけではない。日本が朝鮮半島を植民地支配していた時代には、多くの韓国、北朝鮮の人びとが徴用、強制連行され、強制労働をさせられた。また、韓国、北朝鮮の多くの女性が、日本軍の「慰安婦」＝性奴隷として拉致され、凌辱された。こうした日本の国家犯罪によって、戦後、故郷に戻ることはおろか、今なお安否も分からない人びととその家族も数多い。日本による拉致被害者が、悲しみ、怒り、憤りの感情を露わにすることも、日本政府に真相の究明、謝罪、補償を求める行動も、他国によって家族が拉致されるという事件の様相にはかならない。

冒頭で記した、他国による拉致事件という一般的な語り方のテキストは、家族を拉致された被害者の感情や行動を普遍的な意味として表象する。そこでは同時に、北朝鮮による「日本人拉致事件」という特定の時事的な出来事もたしかに表象される。しかしさらに、日本の植民地支配のもとで起きた強制連行や、「慰安婦」制度＝戦時性暴力による拉致という歴史的な固有性をもった出来事もまた、一連のテキストはその多層的な意味として表象可能なのだ。

このようなテキストを読むときに生成する出来事もまた、一つには、「日本人拉致事件」の被害者たちの感情とその表出を当然とする意味としての出来事である。同時に、日本の植民地支配下にあった朝鮮半島での強制連行や戦時性暴力による拉致被害者たちの感情とその表出を当然とする意味としての出来事も、このテキストを読むことで生成する。さらに、北朝鮮であれ、日本であれ、他国による拉致の被害者たちが、この国家犯罪にたいして悲しみ、怒り、憤りの感情を露わにすることは、当然にして正当な感情とその表出であるという普遍的な意味としての出来事も生成する。つまり、他国による拉致事件を一般的に語るテキストを読むことで、複数の意味としての出来が、文字どおり多層的に生成するはずなのである。

にもかかわらず、一連のテキストが表象可能な意味としての出来事が、そしてこのテキストを読むことで生成する意味としての出来事が、北朝鮮による「日本人拉致事件」にとどまってしまう。まさに、これこそが、反復されつづけてきた「日本人拉致事件」のメディア表象の孕む重大な問題なのである。「日本人拉致事件」の被害者のメディア表象は、彼ら、彼女たちの映像や音声の前にして、人びとがこの出来事を言葉で語ることを失効させる。しかし、この不可抗力は、「日本人拉致事件」を言葉で語ることを失効させているだけではない。上に述べてきたような、「他国によって家族が拉致される事件」といった一般的な語句で語られたテキストの、その多層的な意味としての出来事の表象可能性までもが失効させられているのだ。

「ある国の国家機関なり、それと密接な関係にある組織が、他国の人びとを拉致する」ことは、「重大な人権侵害であり、人びとの尊厳を蹂躪する犯罪行為である」と一般的に語るテキストも、同様の表象可能性をもっている。そこでは、北朝鮮による「日本人拉致事件」も、日本が植民地支配下の朝鮮半島で引き起こした拉致事件も、非道な国家犯罪にして人権侵害事件であるという普遍的な意味としての出来事となって表象され、生成される。ところが、この間のメディア表象は、こうした普遍的な意味としての出来事と同時に、複数の個別具体的な意味としての出来事をテキストが表象する可能性を、北朝鮮による「日本人拉致事件」だけに縮減してしまう。つまり、どのような国家によるものであれ、他国による拉致が非道な国家犯罪であり、重大な人権侵害であるという普遍的な意味が、北朝鮮による「日本人拉致事件」だけに凝着させられるのである。その結果、拉致事件を引き起こした国家が糾弾されることも、加害国として被害者を解放し、被害者に謝罪するのが当然であることも、唯一、「日本人拉致事件」だけに結びつけられる¹⁾。

このようなテキストの表象不可能性は、テレビを中心にした「日本人拉致事件」のメディア表象の不可抗性の問題を如実に示している。テレビニュースなどでは、北朝鮮によって家族を拉致された被害者たちの表情の映像が、他国によって人権を蹂躪された人びとの悲痛な感情を普遍的な意味として表象する。しかし、普通に暮らす人びとが他国によって拉致されるような出来事が、許されない人権侵害事件であることを表現する、テレビ映像の普遍的な意味としての感情は、「日本人拉致事件」だけに還元される。

その理由の一つには、かつての日本が他国で暮らす人びとを拉致した事件の、とりわけその被害者の悲痛な表情が、けっして十分にはテレビ映像となって表象されていないことが挙げられるだろう。「日本人拉致事件」のメディア表象が反復されてきたのとは逆に、日本の植民地支配下での徴用、強制連行の被害者をめぐっては、訴訟を契機とするような限られたイシューでのメディア表象が散見されるにすぎない。「慰安婦」制度という戦時性暴力による拉致被害者のメディア表象にいたっては、忌避され、改変さえされてきた。それを、「植民地支配の『現在』という不快な表象が意識に少しでも入り込むことを必死に防ごうとするかのように、マスメディアは連日、拉致事件報道を強迫的に反復している」（高橋 2004：211）と見ることができるだろう。

それは、たんに報道の歪みや不均衡といった問題ではない。テレビがニュース番組などで表象してきた出来事の時事性（actualité）のなかで、北朝鮮による「日本人拉致事件」はきわめて大きな位置を占めてきた。たしかに、NHKが制作したテレビ番組『問われる戦時性暴力』が、放送直前に右派政治家の介入によって改変された問題が、時事的に取り上げられたことはあった。しかし、かつて日本が引き起こした「慰安婦」制度＝戦時性暴力それ自体は、テレビが表象する出来事の時事性のなかでは、けっして大きな位置を占めてはいない。

時事性とは、「所与ではなく、能動的に生産され、選り分けられ、投資されているし、人造の（factice）、つまり人為的な（artificiel）たくさんの装置によって遂行的に解釈されている」とJ.デリダはいう。そして、「それらの人為的装置は、階層序列をつくって選別するものであり、『主体〔＝臣下〕』たちと代理人たちが決して十分には感知することのないさまざまな利害にいつでも奉仕

しているものなのである」(Derrida et Stiegler 1996=2005 : 10)。メディア表象の時事性を遂行的に解釈する人為的装置の一つが、テレビに固有の仕方出来事を表象するテレビの映像である。反復される「日本人拉致事件」メディア表象のなかで、特定の人格をもった被害者の感情と同時に、普遍的で非人格的な感情も意味として表現するテレビの映像の、その時事的な不可抗力とはどのようなものなのか。この点こそが、問われなければならない。

3. 映画のイメージにおける情動

映画のイメージ (image cinématographique) と、H.ベルクソンが見出した運動イメージ (image-mouvement) との接合を目指して、ドゥルーズはイメージと記号の分類を試みた。そこでは、映画が他の諸芸術と峻別され、「映画によって、世界がみずからのイメージへと生成する」(Deleuze 1983 : 84=2008 : 103) という重要な命題が提起される。そして、運動イメージとしての映画に出現するイメージ、すなわち記号の分類をつうじてとらえ出された感情イメージ (image-affection) が、「顔一般のクロースアップのほとんどに見いだされる」(Deleuze 1983 : 102=2008 : 125) ことをドゥルーズは明らかにした。

映画における感情イメージ、つまり顔のクロースアップという記号=映像とは、運動イメージを形成する情動 (affection) にほかならない。この情動にかんするドゥルーズの説明を、やや難解ではあるがここで見ておこう。

情動とは、〈力〉ないし〈質〉である。それは或る表現されたものである。すなわち、情動は、情動を表現する何らかのものからまったく区別されるにもかかわらず、情動を表現するその何らかのものから独立して存在しているわけではない。情動を表現するのは、顔ないし顔との等価物 (顔貌化された対象) であり… (中略) …それは命題でもある。表現されたものとその表現者との総体、つまり情動と顔との総体は、〔パースの用語で〕「類似記号」(Icône : イコン, 類像・引用者) と呼ばれる (Deleuze 1983 : 138=2008 : 173)。

わたしたちは、力-質の二つの状態、すなわち情動の二つの状態を、それらが互いにどれほど折り込みあっていようと区別する。一方は、情動が、個別化されたひとつの事物状態において、かつそれに対応する現実的連結のなかで… (中略) …現働化される場合であり、他方は、情動が、それに固有の理念的な特異性およびその潜在的接続とともに、時空座標の外で、それ自身のために表現される場合である (Deleuze 1983 : 146=2008 : 182)。

もろもろの情動は、人物や事物を個別化しないが、だからといって空虚という未分化なものなかで混同されるわけではない。情動は、潜在的に接続されるもろもろの特異点を有しており、これらの特異性がひとつの複合的な実質存在を構成するのである (Deleuze 1983 : 146=2008 : 183)。

メディア表象のなかで、テレビが反復する北朝鮮による「日本人拉致事件」の被害者の表情の、とりわけクロースアップの映像を、ひとまずここでは、悲しみの情動ととらえてみよう。そう考えると、この情動は、それを表現する被害者の個々の人格からは区別されながらも、被害者から独立して存在することはない。表現された悲しみの情動と、それを表現する「日本人拉致事件」の被害者の表情のクロースアップの映像との総体が、一つの類像（アイコン）とみなされる。

テレビのニュース番組では、こうした悲しみの情動は、「日本人拉致事件」の被害者が悲しみの感情を露わにするクロースアップの映像となって表象される感情イメージである。そしてこの情動は、被害者が家族の解放と無事な帰還を訴え、その実現に向けて、加害国である北朝鮮にたいするさまざまなアクションを求める会見の場面や、それらを描き、語る現実的連結のなかで現働化されている。

他方で、この情動は、他国によって理不尽に家族を拉致された被害者の感情という理念的な特異性（singularité）と潜在的仮想的（virtuel）な接続によって、このようなニュース番組とは異なる表象のされ方も可能である。この情動は、ニュース番組の映像となって表象されている「今、ここ」の時間、空間の外で、かつての日本による拉致事件なども含めた、他国による拉致の被害者の悲痛な情動それ自体のために表現される場合もありうる。つまり、北朝鮮による「日本人拉致事件」の被害者のクロースアップの映像となった情動には、「人物や事物を個別化しないが」、「空虚という未分化なものなかで混同されるわけではない」、「潜在的に接続されるもろもろの特異点」があるのだ。

「映画によって、イメージが世界へと生成する」運動イメージとしての映画のイメージを考えるのであれば、「日本人拉致事件」の被害者のクロースアップの映像は、このようにして運動イメージを形成する感情イメージである。北朝鮮に家族を拉致された被害者の悲痛な感情を表現する感情イメージは、拉致された家族の帰還を切望する被害者の知覚イメージや、家族の解放のために政治的アクションを求める行動イメージと接続した運動イメージを形成して現働化される。同時にこの感情イメージは、家族を他国に拉致された被害者の情動という理念的特異点によって、かつて日本が引き起こした拉致事件の被害者の感情イメージ、知覚イメージ、行動イメージとも潜在的仮想的に接続可能なのである。

また、ドゥルーズは、こうした運動イメージに疑問を提起する現代映画が、感情イメージ、知覚イメージ、行動イメージの接続を断ち切り、純粋な視覚と聴覚による状況に身を置き、行動と物語を崩壊させていることを指摘する（Deleuze 1990 : 73-74=1992 : 89-90）。そこでは、「感情＝行動の記号が『視覚記号』と『聴覚記号』に席をあげわたし」（Deleuze 1990 : 74=1992 : 90）、従来とは異なるタイプの映像が生まれている。しかし、運動イメージを形成しない現代映画の映像も、やはり他のイメージ＝映像との潜在的仮想的接続を成立させている。

ひとつの映像が孤立することはありません。重要なのは映像相互間の関係です。では、知覚が純粋

な視覚と純粋な音声にきりつめられたとき、もはや行動との関係を失った知覚は、いったい何と関連づけられるのでしょうか。そう、現実の映像は、運動という名の延長から切り離されて、心の映像とか鏡像といった潜在的映像と関係をもつようになるのです (Deleuze 1990 : 75=1992 : 90-91)。

「日本人拉致事件」の被害者の表情の映像を、こうした現代映画に見られるような、純粋な視覚に切りつめられた「視覚記号」と考えた場合も、そこには他の潜在的映像との接続の可能性が見出される。むしろ、それが切りつめられた視覚であるからこそ、徴用、強制連行、「慰安婦」制度などによって拉致された被害者をめぐる心の映像との潜在的仮想的接続が成立する可能性があるといえるのかもしれない。

さらに、ドゥルーズが、運動イメージとしての映画のイメージと、現代映画に顕著に見られるような映画のイメージとを対比して、つぎのような指摘をしていることにも、とくに注目しておく必要があるだろう。運動イメージでは、最初に見えるのは文字どおりの運動であって、それが時間を生成させる。現代映画のような映画のイメージは、最初に時間が見える時間イメージ (image-temp) であり、それが運動を生成させる (Deleuze 1990 : 75=1992 : 90-91)。

北朝鮮による「日本人拉致事件」の被害者の表情の映像を、顔のクロースアップの映像とみなすなら、それは感情イメージであり、知覚イメージや行動イメージと接続して運動イメージを形成する情動である。そして、こうした運動イメージが映画のイメージとしての時間を帰結する。また、同じ映像を、純粋な視覚と聴覚にきりつめられ、知覚イメージや行動イメージとは接続しない視覚記号 (opsigne)、聴覚記号 (sonsigne) とみなすなら、それは他の潜在的仮想的映像と接続し、時間イメージとなって映画のイメージとしての運動を生成させる。

これまでの考察では、運動イメージにせよ、時間イメージにせよ、映画のイメージの形成を援用して、「日本人拉致事件」の被害者の映像と、他のさまざまなイメージや、潜在的仮想的映像との接続を検討してきたことを忘れてはならない。問題は、顔のクロースアップであれ、視覚記号であれ、「日本人拉致事件」の被害者の悲痛な表情の映像が、映画のイメージではなく、こういってよければ、テレビ的イメージを形成するイメージ＝記号だという点にある。つぎに考えなければならぬのは、テレビ的イメージとは何かという問題である。

4. ニュース番組における出来事の人為時事性

「テレビを見ること」には、映画を見ることとは異なる特性が認められる。それは、つぎの三点に集約できるだろう²⁾。第一に、映画とは異なって、テレビはもっぱら家庭というドメスティックな空間的、時間的コンテクストのもとで見られている。第二に、そのような文脈性ゆえに、「テレビを見ること」は他の生活上のさまざまな活動と混合した「流れ (flow)」となって展開されている。そして第三に、このような「テレビを見ること」であるからこそ、テレビには「凝視よりも一瞥」の眼差しが向けられることが多い。テレビ的イメージも、こうした「テレビを見ること」の特

性とけっして無縁ではありえない。

テレビ放送のテクノロジーは、そのさまざまな技術的可能性のなかでも、映像によって、家庭で居ながらにしてさまざまな出来事が経験できることを際立たせてきた。「テレビを見ること」のドメスティックな文脈性とは、こうしたテレビ放送の技術を基盤に成立しているといえる。さらにテレビ放送のテクノロジーは、一日の時間の流れに沿って、いくつもの番組が間断なく放送される番組編成の流れを作り出した。また、個々の番組のなかでも、それぞれの番組の時間の流れに沿って、いくつもの出来事が連鎖していく流れを生み出し、さらに出来事を表象する無数の映像の流れを作り出してきた (Williams 1975 : 99)。「テレビを見ること」が家庭における生活上のさまざまな活動と混合した流れになるのも、このようなテレビ放送の技術がもたらしたものの一つである。そして、テレビ放送における番組制作と送出をめぐるテクノロジーの革新、あるいはテレビ受像機をめぐるテクノロジーの革新が多様な映像を可能にしてきた。その結果、テレビへの一瞥の眼差しが、多種多様な出来事を生成するようになった。

もちろん、「テレビを見ること」の特性は、テレビ放送のテクノロジーだけによるものではない。ニュース番組やドキュメンタリー番組を見ることによって、家庭で日常的に政治的・経済的出来事や社会的出来事の経験が可能になる。また、スポーツ番組やドラマ番組、クイズやゲームなどの番組を見ることで、日常的に文化的な出来事の経験も可能になる。このような「テレビを見ること」が成立するには、家庭という空間と時間をめぐる、さまざまな社会的な要因がある。いくつもの番組の流れ、テレビ番組が表象する出来事の流れ、出来事を表象する映像の流れが、さまざまな生活上の活動と混合した出来事の経験となるには、人びとの日常生活にかかわる社会的要因もある。さらに、テレビへの一瞥の眼差しに生成する意味としての出来事が経験されるようになるのにも、さまざまな社会的要因があることは、もはやいうまでもないだろう。

「テレビを見ること」の特性は、このようなテレビ放送の技術的特性と、家庭という空間と時間、人びとの日常生活、人びとの出来事の経験の社会的特性とが重なり合うところに成立している。テレビ放送の技術的特性が、家庭や日常生活や出来事の経験の社会的特性をもたらしたのかもしれない。逆に、家庭や日常生活や出来事の経験の社会的変化が、テレビ放送のいくつもの技術的可能性のなかから、こうした特性を顕在化させたのかもしれない。いずれにしても、ここで明確なのは、出来事の空間と時間、出来事の形成、出来事の表象をめぐる、「あらゆる中継地点をあらかじめ破壊するような社会的機能」(Deleuze 1990 : 102=1992 : 122)をテレビが獲得したことである。つまり、「テレビとは、無媒介的に社会性をおびてしまう技術であり、しかもこの技術は社会的なものにたいするズレをまったく許容しない。テレビとは純粹状態に置かれた社会性と技術性のこと」(Deleuze 1990 : 105=1992 : 127)なのだ。

テレビ番組は、こうしたテレビの技術性と社会性を基盤として制作されている。言い換えるなら、それは、「テレビを見ること」の特性と密接に結びついたプロダクツである。そのような意味で、テレビ番組は、たとえいかに優れた番組と評価されようとも、映画のような「作品」ではなく、あくまでも「番組」として考えられなければならない。

ニュース番組について考えてみよう。この種の番組は、平日は、概ね早朝の5時頃から午前10時頃まで、午前11時台後半から午後1時頃まで、夕方5時頃から7時台まで、夜9時台、そして夜10時台から翌日0時台までの時間帯に編成されている。人びとは、家庭で身支度をしたり、食事や家事をしたり、帰宅後や就寝前のひとときを過ごしたりしながら、そうした活動と混合した流れとなった時事的な出来事を経験するのだ。

ここで重要なのは、ニュース番組ではどのような出来事であっても、限定された時間帯の、さらに細分化された時間のなかで、それが表象されていることである。それゆえに、たとえ「今後の動向が注目されます」といった発話がされても、出来事はひとまず完結しなければならない。だからこそ、時事的に重要な出来事であればあるほど、束の間に経験されてもなお不可抗的な意味としての出来事となって一瞥の眼差しに生成し、しかも反復されなければならない。逆に、一瞥の眼差しに生成する不可抗的な意味としての出来事が、反復して表象されることで、その時事的な重要性が増すともいえる。

ニュース番組では、出来事がこのように表象され、人びとに経験されている。それゆえに、出来事の時事性（*actualité*）は、デリダのいうように「能動的に生産され、選り分けられ、投資され」、「人為的な装置によって遂行的に解釈されている」と考えなければならない。出来事は、より多くの人びとが、家庭における生活上の活動と混ざり合った流れになるように、その時事性が能動的に生産され、選り分けられ、投資される。その過程で、出来事を表象するイメージ＝映像は、さまざまな感情イメージ、知覚イメージ、行動イメージとして表象され、相互に接続されながら、その時事性が遂行的に解釈される。

テレビに向けられる一瞥の眼差しに生成する意味としての出来事は、出来事の当事者や関係者の表情のクローズアップの映像、すなわち感情イメージとなって表象され、その不可抗性によって時事性が高められる。また、出来事は、それを表象する感情イメージが反復され、より多くの人びとの、頻繁な一瞥の眼差しが向けられることでも、その時事性が高められる。このような感情イメージが、知覚イメージや行動イメージと接続した運動イメージは、より多くの人びとのドメスティックなコンテクストのもとで、生活上の活動と混合した流れとなって、さらにその時事性を増す。そのとき、そこでは、出来事をめぐる支配的な政治的経済的状况、社会的文化的状况、あるいは世論や価値観などと結びついたニュースの物語を作り出すような、広範に共有可能で、しかも完結した運動イメージが形成されるのだ。まさに、このような出来事の人為時事性（*artefactualité*）にこそ、「無媒介的に社会性をおびてしまう技術」、「純粋状態に置かれた社会性と技術性」としてのテレビの特性が如実に表れているのである。

5. テレビ的イメージの不可抗性と可能性

テレビへの一瞥の眼差しに生成する顔のクローズアップの映像も、感情イメージとして、知覚イメージや行動イメージと接続して運動イメージを形成する情動であるのかもしれない。しかし、テ

テレビ番組のなかの顔のクロースアップの映像によって形成される運動イメージは、明らかに映画のイメージとしてのそれとは異なる。テレビ番組は、家庭というドメスティックな空間的、時間的コンテクストのもとで見られる、いくつもの番組の流れのなかに編成され、しかも、いくつもの出来事の流れとなっているからである。番組が見られるとき、それを構成しているさまざまな映像は、日常の家庭におけるさまざまな生活上の活動と混合した流れとなって、感情イメージ、知覚イメージ、行動イメージが接続した運動イメージを形成するからでもある。

このような運動イメージにおいて、「テレビを見ること」としての出来事は経験される。そして、そこに生成する時間が、日常的に出来事を経験する時間となるのである。テレビでは、顔のクロースアップの映像が形成するのは、一切の中継地点がないまま無媒介的に生活上の活動と混合することで社会性をおびてしまう運動イメージなのだ。これこそが、テレビ的イメージとしての運動イメージにはかならない。

とくにニュース番組の場合、ごく短い時間で完結する時事的な物語になりうる運動イメージが形成され、しかもそれは、しばしば反復される。感情イメージ、すなわち人物の表情のクロースアップの映像も、このような運動イメージを形成するのにふさわしい映像として能動的に生産、もしくは制作されている。別の言い方をすると、感情イメージは、他のさまざまな知覚イメージや行動イメージと接続して、時事的なニュースの物語を形成できるように飼い馴らされた映像なのである³⁾。それは、今日のニュース番組で多用されている、出来事の当事者や関係者の顔のクロースアップの映像に端的に現れている。それらの多くが、現場からの中継映像ではなく、素材映像から「選り分けられ」たクロースアップの映像である。中継映像であっても、準備された会見での「能動的に生産され」、「投資された」クロースアップの映像である。このような感情イメージが、同じように能動的に生産され、選り分けられ、投資された知覚イメージや行動イメージと接続される。そして、出来事をめぐる支配的な政治的経済的状况、社会的文化的状况、世論や価値観と結びついた時事的な物語へと展開していく運動イメージが形成されるのである。

ニュース番組のなかで、出来事の運動イメージを形成する感情イメージは、こうした人為時事性を形成する文字どおりの現実的連結のなかでのみ現働化される情動にはかならない。支配的なニュースの物語へと展開していく運動イメージを形成する現実的連結が、感情イメージの理念的特異点を抑圧し、情動となって現働化している時空座標の外での、潜在的仮想的な接続可能性を排除しているのだ。

テレビニュースで反復されてきた、北朝鮮による「日本人拉致事件」の被害者の、その表情のクロースアップの映像は、たしかに悲しみ、怒り、憤りの感情イメージである。それは、他国によって家族を拉致された人びとの悲しみ、怒り、憤りの不可抗的な感情イメージである。このような感情イメージが、北朝鮮に拉致された家族の解放を求める被害者の知覚イメージや、被害者救済のために加害国北朝鮮にたいする強い外交的圧力を主張する行動イメージと接続した運動イメージを形成している。感情イメージの不可抗性が、拉致された日本人家族の解放を北朝鮮に要求することはもとより、北朝鮮にたいする外交的、さらには軍事的な強硬姿勢をとることを主張する運動イメー

ジの不可抗性さえも形成しているのだ。こうした運動イメージが、北朝鮮による「日本人拉致事件」をめぐるこれまでの人為時事的なニュースの物語となって反復的に展開されてきたのである。

「日本人拉致事件」の被害者の悲痛な感情イメージは、運動イメージの人為時事性を形成する現実的連結のなかでのみ現働化される情動となっている。つまり、北朝鮮に家族を拉致された人びとの表情のクロースアップの映像は、拉致された日本人を解放するために、北朝鮮にたいして強硬な姿勢を貫くべきだと語る、テレビニュースの物語のなかでのみ現働化される情動なのである。「日本人拉致事件」の被害者の感情イメージのもつ、他国によって家族を理不尽に拉致された人びとの悲しみ、怒り、憤りという理念的特異点が、こうして抑圧される。この感情イメージは、みずからが不可抗の情動として現働化されている時間、空間の外で、かつての日本による拉致事件の被害者の感情イメージ、知覚イメージ、行動イメージと潜在的仮想的に接続される可能性を排除されているのだ。

「テレビを見ること」としての「日本人拉致事件」は、このような運動イメージとなって人びとに経験されてきた。それは、拉致された日本人解放のために北朝鮮に経済制裁せよと主張するテレビニュースの運動イメージであり、そこから時事的に支配的なニュースの物語が展開される。この運動イメージが、「日本人拉致事件」という出来事を日常的に経験するドメスティックな時間を生成している。人びとがテレビニュースで繰り返し見てきた被害者の表情のクロースアップの映像が、無媒介的に日常生活に混合して社会性をおびる、こうした不可抗の運動イメージを形成しているのだ。これこそが、北朝鮮による「日本人拉致事件」のテレビ的イメージとしての運動イメージにはかならない。ここではまさに、「テレビによって、社会がみずからのイメージへと生成する」という命題が提起されてもよいだろう。

デリダはみずからの思想の中心的概念である「差延 (différance)」こそが、出来事の人為時事性を脱構築し、出来事が「最終的に保っている還元不能なもの」を到来させると考え、つぎのように述べている。

差延は、ある関連 (une féerance [運搬作用]) を記す——他なるものへの関連、他性の意味での異なるものへの関連、したがって他性への、他者の単独性への関連——「と同時に」、差延は、また、まさにそれであるがゆえに、加速自体を、自己固有化できない、思いがけない、切迫した、予期できない仕方であるもの、到来するものに関連づける (Derrida et Stiegler 1996=2005 : 21)。

また、ドゥルーズは、「映画的時間とは流れ去る時間ではなく、持続し、共存する時間」であって、「保存」が「創造することであり、休みなく〈代補 (supplément : 補遺・引用者)〉をつくりだすこと」であるという。そして、この〈代補〉の特性は、「創造する以外の道がありえないということである」ともいう (Deleuze 1990 : 105=1992 : 127)。このような前提に立って、テレビ的イメージの可能性を、ドゥルーズはつぎのように指摘している。

〈代補〉の、あるいは保存による創造の力を、どうしてテレビに認めてはならないのか？ 原則的にそうしてはならないという理由はどこにもありません。映画とは別の手段を使うことによって美学的機能があらわれたとき、それを（ゲームやニュースといった）テレビの社会的機能によって押しつぶすことがなければ、テレビに〈代補〉や保存による創造の力を認めることは十分に可能になるはずです（Deleuze 1990 : 105=1992 : 127）。

テレビ的イメージとしての出来事の人為時事性を脱構築するためには、デリダが提起する「差延」は、いったいどのようにすれば実現するのだろうか。同様に、ドゥルーズが指摘するテレビ的イメージの〈代補〉や保存による創造の力とは、いったいどのような力で、それはどのようにすれば実現するのだろうか。こうした問いは、たしかに、今日のわが国におけるテレビ研究、メディア文化研究にとっての思想的、理論的課題であるが、むしろそれ以上に実践的、制度的課題になっていることを示唆して、本稿の結びに代えたい。

【註】

- 1) 2000年代になってからのメディア表象によって描かれ、メディア言説によって語られる出来事が、この種の不可抗的な「普遍性」をもつ事態がしばしば見られる。その典型的なものの一つとして、小泉純一郎元首相の靖国神社公式参拝を、「戦死者を心から追悼する、ごく当然の心の問題」だと語る言説をあげることができるだろう。とくにこの問題については、小林（2010）で詳細に論じている。
- 2) この点については、小林（2005, 2007）を参照のこと。
- 3) 逆に、テレビニュースにとって、もっとも飼い馴らされていない映像とは、出来事の現場の生中継といえるだろう。今日のニュース番組では、例えば、阪神大震災や1985年の「日航ジャンボ機墜落事故」のような、時事性が著しく高い事件の場合に現場の生中継の映像が使われるが、普段の中継映像は、記者会見や、あらかじめ生産、制作された「現場から」の放送記者のレポートの場面などである。1968年3月、TBS系列のニュース番組『ニュースコープ』のなかの、成田闘争における当時の三派系全学連と機動隊との衝突事件の中継が、放送記者の「公正」さに欠ける発言をとまっていたといわれ、大きな問題とされた（萩元、村木、今野 1968=2008 : 115-116）。これは、ニュース番組にとって中継映像が「飼い馴らされていない」映像であることを表した一つの事例である。

【引用文献】

- Deleuze, G. (1969) *Logique du sens*, Les Éditions de Minuit.
- Deleuze, G. (1983=2008) *Cinéma 1— L'image-mouvement*, Les Éditions de Minuit. (財津理, 齋藤範訳『シネマ1＊運動イメージ』法政大学出版局)
- Deleuze, G. (1990=1992) *Pourparlers 1972-1990*, Les Éditions de Minuit. (宮林寛訳『記号と事件——1972—1990年の対話』河出書房新社)

- Derrida, J. et Stiegler, B. (1996=2005) *Échographies de la télévision*, Galilée-INA. (原宏之訳『テレビのエコーグラフィー——デリダ〈哲学〉を語る』NTT出版)
- 萩元晴彦, 村木良彦, 今野勉 (1968=2008) 『お前はただの現在にすぎない——テレビになにが可能か——』朝日新聞社
- 小林直毅 (2005) 『『テレビを見ること』とは何か』NHK放送文化研究所『放送メディア研究』No. 3
- 小林直毅 (2007) 「日本におけるテレビ分析の試みと課題」日本記号学会編『新記号論叢書〔セミオトポス〕 4 テレビジョン解体』慶應義塾大学出版会
- 小林直毅 (2010) 「記憶としての『終戦』と天皇——メディア天皇制批判序説——」田中義久編『触発する社会学』法政大学出版局
- 高橋哲哉 (2004) 『証言のポリティクス』未来社
- Williams, R. (1975) *Television: Technology and cultural form*, (Second edition published 1990) Routledge.